

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名： 外国語第 I 教育部会
部会長名： 加藤雅之
作成者名： 加藤雅之

概要（2000 字）

1. 実施体制について

平成 24 年度においては、外部試験の一律導入、グローバル人材養成など外部プロジェクトへの応募など、英語教育をとりまく環境の変化により迅速かつ有効的に対応するため、「企画、運営、実施」における「二元化」状況を改善するためセンター内に英語教育企画委員会（以下企画委員会）を設置することとなった。その結果、従来の部会長・幹事による体制を見直し、「企画、運営、実施」体制の一元化をはかることとし、センター内の企画委員会幹事 4 名が部会内での部会長・幹事を兼ねることとなった。

なお、後期に必要な生じた非常勤採用時より、JRECIN を活用した公募方式に切り替えることになった。1 名の枠に対して 11 名の応募があるなど、大きな反響があった。さらに、25年度の非常勤採用に際しては、英語による募集要項作成を行い、数多くのネイティブを含む 30 名の応募者から 6 名（うちネイティブ 4 名）を採用することができた。

2. 授業・カリキュラムについて

今年度は 23 年度のカリキュラムを踏襲するかたちとなり、特記すべき変化はなかった。

なお、「グローバル人材育成推進事業」の採用を受けて、25 年度より、Global English Course の導入が決定され、本年度はこの GEC コースのカリキュラム作成および、担当者採用などの準備を行っており、以下の変更を行う予定である。

- ・全学対象外部試験による習熟度別クラス編成
- ・GEC コース（留学希望学生を中心とした PSA とそれ以外の GEM コース）の導入

3. 特別単位認定制度

1 年次に TOEIC の「リーディングセクション」において 350 点以上の点数を取得した学生に対し 2 年次前期開講科目である「リーディングⅢ」を、「リスニングセクション」において 350 点以上を取得した学生に対し「オーラルⅢ」を「優」の成績で認定している。本年度は、「リーディングⅢ」が 136 名、「オーラルⅢ」が 173 名で、認定単位数で見れば、昨年度の 297 単位から 309 単位と微増した。なお、本制度については、企業や他大学での TOEIC/TOEFL の普及状況などに鑑み、一定の役割を果たすことができたと位置づけ、本年限りの措置とすることになった。

また、1 年次においてアメリカ合衆国またはオーストラリアの大学で 3 週間の海外語学研修を修めた学生にも、研修の成績に応じてオーラルⅢ の 1 単位を認定しているが、本年度はワシントン大学で研修を行い、単位認定者は 9 名であった。（これらの単位は 25 年度前期の授業の成績に反映される）。

4. 活動の状況（授業実施にあたっての工夫や問題点）

4-1. 外国語オリエンテーションは、本年度より外国語授業の第一週目に第 I・第 II 外国語それぞれの教室で担当教員が行うことになり、そのために昨年度 3 月 6 日に、担当教員のためのガイダンスが実施された。25 年度用ガイダンスは 3 月 28 日に実施され、オリエンテーションの実施詳細、教務事項説明、田中理事・大野部長による本学における外国語授業科目の位置づけなどの説明があった。学生ガイダンスのために『外国語ハンドブック』2013 年度版を準備した。

4-2. シラバスの改善

新しい教務システムの導入にあわせ、昨年度より実施してきた担当者全員にシラバス記入を義

務づける制度をさらに徹底させた。評価方法については、単位の実質化に配慮し、複数の評価要素を組み合わせ、それぞれの割合をできるかぎり明確に数値で記入するように指導した。記入されたシラバスについては、部会長・幹事ですべて点検し、一部教員には、部会の基準に従い、書き直すよう依頼した。この部会によるシラバス点検は来年度も継続する。

4-3. ピア・レビュー、FD

今年度の共通教育のピア・レビューの対象として当部会は含まれなかったため、部会内のピア・レビューは行われなかったが、部会独自でのピア・レビューについても、国際コミュニケーションセンターで行われているビデオ録画形式を参考に検討する余地があると思われる。また、FD 活動も特に行われなかったが、これも来年度の課題としたい。

5 自己点検・評価報告について

自己点検・評価報告書は3月8日の部会長へのとりまとめ以後、断続的に提出を求め、4月12日段階で45名の送付があった。その結果おおむねすべての観点について「はい」の回答があったが、6-1-②では若干否定的な評価もあった。これは、学習成果の上昇の判断材料として、学生アンケート以外に難しく、また、そのアンケートへの回答分母が小さいためごく少数の学生の判断に寄らざるを得ない面があったためと思われる。また、7-2-①の観点は英語の授業にはあてはまらないため、あらかじめ回答不要の指示を出しておくべきであった。7-1-①、7-1-②については自由回答を挙げておく。

7-1-①

- ・K303 教室は横長の教室であるため、グループ活動を行う際に学生間、また教師と学生とのコミュニケーションが取りやすい。
- ・CALL 教室を利用しているが、机間隔が狭く、移動しにくい。緊急時、後ろドアが利用できないのも問題である。
- ・C206、F201 教室で、空調の音がうるさく、学生の声が聞き取れないことがあった。
- ・教室の設備としては黒板、教壇、机等、標準的な整備がなされており、授業を進める上で何の支障もない。
- ・D 棟は改装され教室の設備も一新され、使いやすい。
- ・午前中の授業で、朝日が教室に差し込むことで、画面が見にくい、等の問題があった。
- ・5 限目ということで、音楽系のクラブが近くの教室を使っており、騒音がひどかった。教室を変更したが、広がってしまい、座席が分散し、声がとどきにくい、まとまりが持てないという難点があった。
- ・教室の机と机の間が狭く、授業中学生的間を歩き回れない。また教室が縦長で、教師からも学生からも声が届きにくい。
- ・CALL 教室の空調の調節がしにくい。
- ・CALL 室の端末に不具合（音声が出ない、パソコンが壊れている、マウスが壊れているなど）が時折あるのだが、常々から整備されていることが望ましい。
- ・オーラル活動に向かない一般教室で、施設設備の不備による支障が出た。マイクも使えないものが何度もあった。途中で使えなくなることもあった。映像が映らない、音声だけ、という不具合も何度かあった。
- ・オーラル I の授業では、音声や映像教材を使用するため音が漏れ、他室への影響がある。そのため、程度に応じて、CALL 教室への防音整備が必要と思われる。

7-1-②

- ・K303 教室は DVD 視聴、プレゼンにおけるパワーポイントの使用が可能であり、教育活動を展開する上で有効に活用できる。
- ・CALL 教室を利用しているが、机間隔が狭く、機材も使い勝手がよいとは言えない。一クラスの

人数が多すぎて、効果的な授業が出来ない。

- ・CALL 教室は、時々学生のパソコンが不具合を起こし、授業の妨げになる。
 - ・教室で音声や映像、コンピュータ画像を再生する設備は整っている。また教務課でノートパソコンの貸し出しも行われており、十分な教育支援が行われている。
 - ・学生ひとりに PC 一台の ICT 環境が整備されている。
 - ・午前中の授業で、朝日が教室に差し込むことで、画面が見にくい、等の問題があった。
 - ・資料として、画像を見せることができたので、充分だった。
 - ・CALL 教室の「先生呼び出し」機能を利用し、group work に応用したが、場所によって電氣的反応に差があると不平のコメントがアンケート上でなされていた。また、ホワイトボードのマーカーが出ない事が多く、授業開始後に気づいた場合、対処しづらい事があった。
 - ・オーラル III の場合は、CALL 教室が必要な授業ないようでも、CALL 室があてがわれないことがある。その場合は普通教室でオーラルの授業をするのだが、非常にやりにくい。
- ICT 環境はよくできているようだが、初めての授業担当者はちょっと操作が難しかった(509号)。
- ・一般教室で教務係より貸し出されるカセットレコーダーは古くて授業運営に大きな支障あり。他の CDMD カセット再生機器でも対応できず、たとえばディクテーションやシャドーイングを学生の学習、習得状況に応じて使う事が困難である。教卓から一般教室に座る学生向けに発信される音響にムラがあり、クレームがついた。スクリーンで写し出される画質が良くない。
 - ・オーラル I の授業では、CALL 教室が割り当てられるため、ICT 環境を活用した授業展開が可能であり、個々の学生に音声ファイルの視聴やスピーキング録音などの機能が有効に活用できる。今後、CALL 教室でオーラル授業を継続できるよう、CALL 教室の更新整備が望まれる。

6 その他

6-1 6-1-②の設問について

達成度や満足度についての根拠資料として、学生アンケートの結果を用いることは、本資料が部会長を経由しての提出となっており、本来個人の授業改善のために用いられるべきアンケート結果が別の形で流用されることになるとともに、きわめて少人数による結果を使わざるを得ないこともあり、実態を反映しない結果を招来する恐れがあるため、来年以降は根拠資料として使わない形での改善をお願いしたい。

6-2 全体に対して

こうした「はい・いいえ」で答えるやり方自体に対して疑問を呈する意見が一件あったことを付記する。

「関係各省庁の指導かもしれませんが、ベスト、ワーストという2つの範疇で括るという雑な概念は、日本古来の文化と伝統には、本来存在しないものです。カント哲学の微分という考え方を見ても、ヨーロッパの知識層にはなじまないとおもいます。むしろ軽侮されるものです。荒ぶれた雑なアメリカの乱暴な思考方法だと思います。「はい」と「いいえ」だけの回答方法、数字での評価、イエスとノーだけで決めるのは最も不正確で乱暴な決定の仕方です。」

様式2（続き）

項目・観点ごとの記述

基準5 教育内容及び方法

5-1 【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であること。】

5-1-③： 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。

（観点到に係る状況）

学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮したものとなっている。

根拠資料
各教員の自己点検・評価報告書

5-2 【教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。】

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

（観点到に係る状況）

講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されている。

根拠資料
各教員の自己点検・評価報告書

5-2-②： 単位の実質化への配慮がなされているか。

（観点到に係る状況）

単位の実質化への配慮が一定程度なされている。

根拠資料
各教員の自己点検・評価報告書

5-2-③： 適切なシラバスが作成され、活用されているか。

（観点到に係る状況）

適切なシラバスが作成され、活用されている。

根拠資料
各教員の自己点検・評価報告書
教務情報システム

5-2-④： 基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。
(観点に係る状況)
適切な配慮が行われている。

根拠資料
各教員の自己点検・評価報告書

5-3 【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっていること。】

5-3-②： 成績評価基準が策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。
(観点に係る状況)
成績評価基準が策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されている。

根拠資料
各教員の自己点検・評価報告書

5-3-③： 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための措置が講じられているか。
(観点に係る状況)

【該当なし】

根拠資料

基準6 学習成果

6-1 【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていること。】

6-1-②： 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。
(観点に係る状況)
おおむね学習成果が上がっている。

根拠資料
各教員の自己点検・評価報告書

基準7 施設・設備及び学生支援

7-1 【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。】

7-1-④： 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

(観点に係る状況)

おおむね効果的に利用されている。

【該当せず】

根拠資料

7-2 【学生への履修指導が適切に行われていること。また、学習、課外活動、生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われていること。】

7-2-①： 授業科目、専門、専攻の選択の際のガイダンスが適切に実施されているか。

(観点に係る状況)

【該当せず】

根拠資料

7-2-②： 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。

また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。

(観点に係る状況)

学習相談、助言、支援が適切に行われている。

根拠資料
各教員の自己点検・評価報告書